



Title	植民地期の「朝鮮玩具」
Author(s)	権, 錫永
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 139, 1(左)-23(左)
Issue Date	2013-03-21
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/52316">http://hdl.handle.net/2115/52316</a>
Type	bulletin (article)
File Information	03_KWEON.pdf



[Instructions for use](#)

## 植民地期の「朝鮮玩具」

クォン ソク ヨン  
権 錫 永

### はじめに

本稿は、「朝鮮玩具」という枠組みから日韓関係史の一断面をとらえることを目的とする。

「玩具」という概念は、日本統治以前の朝鮮社会にはなかったものであり、その後も、言葉としては輸入されても、それが「장난감(おもちゃ)」以上の意味で用いられることはなかった。日本語の「玩具」は、一般的にはおもちゃの意味だが、玩具愛好家の間ではおもちゃとは多分に異なる意味内容を持つものとして流布した。それを理解するために、まず先行研究を参考にしながら、日本の玩具愛好の系譜を辿ってみよう。

始まりは明治中期の「江戸趣味」であった。明治初年代、文明開化を進める政府は従来の生活習慣を「野蛮」な風習として排除したが、そうした動きの中で、張り子や木製の陽物の縁起物が禁止され、五節句が廃止されるなど、子ども文化にも大きな変化が現れた<sup>1</sup>。山口昌男や斉藤良輔らが詳細に明らかにしてきたように、こういった過度な欧化主義の反動として国粹主義の流れが形成され、「江戸趣味」と呼ばれる一連の江戸文化復興の動きが出現した。当時の趣味人たちによって特に注目されたのが古い玩具類であった<sup>2</sup>。その

<sup>1</sup> 下川耿史編『近代子ども史年表 明治・大正編』河出書房新社、2002年。神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』世界思想社、2011年、29-30頁。

<sup>2</sup> 斉藤良輔『おもちゃと玩具』未来社、1965年。山口昌男『「敗者」の精神史』岩波書店、

「起こり」とも言える「竹馬会」について、神野由紀は次のように述べている。

この頃、遊食会という、出されたお題に困んだ食物を持ち寄って味わい、批評しあう好事家の会が、仮名垣魯文（戯作者）、竹内久一（彫刻家）、幸堂得知（作家）らによって開かれていた。明治一三年三月に向島の料亭で催された会は、「子どもの時分に返って一日を無邪気に送る」というテーマに因み「竹馬会」という名で開かれた。会場には食物以外に玩具を一品ずつ持ち寄ることになった。(略)清水晴風も、参加者の一人であった。各地の玩具がその土地の歴史や文化を表していることに感銘を受けた晴風は、以後古い玩具の収集に熱中していくことになる。好評だった「竹馬会」はその後、回を重ねることになり、(略)様々な分野で活躍する多彩なメンバーが次々と加わり、以後の玩具趣味コミュニティーの基礎を築いていった<sup>3</sup>。

このような古いものへの趣味的な関心はさらに広がっていき、1896年には坪井正五郎の呼びかけにより、「集古会」が結成された。「集古会」は古物を持ち寄って品評する活動を行ったが、「学術的な古物への関心とは一線を画する、談笑することが目的の集まり」であった<sup>4</sup>。その間に、清水晴風は、「竹馬会」をきっかけにして自ら収集した古い玩具をもとに、玩具の画集『うなるの友』第一編を出版し、数回にわたり版を重ねた<sup>5</sup>。

ところで、以上のような古物趣味の流れにおいて、早くも「玩具」をめぐる考え方には分裂が生じていたようである。神野は、同じく「集古会」のメンバーだった坪井正五郎と清水晴風の考え方に触れた天沼匏村『玩具の話』（芸艸堂、1914年）に基づいてその違いを指摘している。「坪井は子どもが生活の中で遊ぶための玩具を扱っているのに対し」、清水は玩具を①信仰的に

---

1995年。前掲書、神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』、30頁。

<sup>3</sup> 前掲書、神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』、30-31頁。

<sup>4</sup> 同上、31-32頁。

<sup>5</sup> 清水晴風、西沢笛畝『うなるの友』芸艸堂、1891年。

造ったもの、②記念的なもの、③子どもに与える物の三つに分類した。つまり、坪井と違って清水は、「子どものための玩具」を「玩具の中の一部として」分類しているに過ぎないと言うのである<sup>6</sup>。こうした「玩具」概念の分裂は、後に清水の考え方が主流になる形で解消されていったように思われる。その契機となったのは、1930年前後からの郷土への関心の高まりである。それまで「土俗玩具」「大供玩具」「諸国玩具」などと呼ばれていた玩具類が「郷土玩具」という名称に統一されていくのもこの頃からである<sup>7</sup>。

佐藤潔『玩具と縁起』（人文書院、1935年）の「序」にその辺の事情を窺わせる記述がある。佐藤はこう述べる。一近代科学の進歩発達によって農村が都会化していく中で各地方の「郷土色」が次第に薄れていく。従来、人間の力でなし得ないことについて、人々は神や仏に頼ってきたが、その観念もますます薄れつつある。「殊に縁起的なものは過去の存在として、漸次亡びゆかんとしつゝある傾向」にある。その「過渡期」の今は、「去りゆくものをおしみ」、これを研究する「絶好の時」である<sup>8</sup>。佐藤の関心が、おもちゃと同義の「玩具」というより、「郷土色」が色濃く表れているものや「縁起的なもの」に向いていたことが分かる。そして、中村美佐雄の後の言葉を借りて言うならば、そうした関心が、従来「飾物視」されてきた郷土的なもの（小物）への愛好を生むと同時に、「単に『おもちゃ』として、片付けられぬもの」があるという自覚をも生むことになった<sup>9</sup>。

総じて、1930年前後からの日本では、「玩具」といえばすべてのおもちゃを含むが、特別に郷土色の濃いものを指して「郷土玩具」と言い、それを略して「玩具」とも言う<sup>10</sup>。結局のところ、玩具を収集し研究するとは、「おもちゃ」

<sup>6</sup> 前掲書、神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代—拡大する商品世界』35-37頁。

<sup>7</sup> 同上、41頁。

<sup>8</sup> 佐藤潔『玩具と縁起』人文書院、1935年、「序」。

<sup>9</sup> 中村美佐雄『郷土玩具の研究』旅行文化社、1943年、「序」。

<sup>10</sup> 万造寺龍『民俗信仰の玩具』（書物展望社、1938年）の「自序」に、次のような一節がある。「読んで呉れる人にわかるやうに、『玩具』と書いてゐるが、これはわかるために（一般は郷土玩具と呼んでゐる）書いた名で、実際は神或は人のこゝろを救ふ仏なのであり、

一般から郷土的なものを見つけ出して「郷土玩具」へと仕分けする作業であり、また「飾物視」されてきた郷土的なもの（小物）を「郷土玩具」として分類する作業である。そのため、必然的に、「郷土玩具」の中にはおもちゃとは言えないような小物までが混じらざるを得ず、その混溶性または分類の曖昧さは、「郷土玩具」というカテゴリーの重要な特徴となっている。かつて清水晴風がそうであったように、各地から収集した郷土的な小物を見て楽しむことを「愛玩」<sup>11</sup>と表現した玩具愛好家たちにとって、それらの小物と「持って遊んで楽しむ道具としての郷土的なおもちゃ」との間に、さほどの距離はなかったと考えられる。要するに、「郷土玩具」とは郷土的な小物に他ならず、おもちゃはそれを構成する一要素だったと見るのが妥当だろう。

日本の玩具愛好家たちが朝鮮に探求の目を向けた時、彼らの視線が探し求めたものもこの二つを合わせた「郷土玩具」、すなわち、郷土的な小物であった。そこに生まれ落ちたのが「朝鮮玩具」（＝「鮮玩」）というカテゴリーである。「朝鮮玩具」に関連しては、朝鮮、満州、南洋諸島などの「外地」にまたがって活動した玩具愛好家集団の緊密なネットワークと、それによる「帝国コレクション」について明らかにした鈴木文子の研究がある<sup>12</sup>。もう一つ、日本人によって観光客向けの土産品として生産・販売された「朝鮮風俗人形」（特に一刀彫りの人形）の性格と、その独立後の韓国社会への残存を明らかにした権ヒョッキの研究がある<sup>13</sup>。風俗人形が玩具愛好家の間で「朝鮮玩具」の代表的なものの一つであったことからすれば、権の研究は「朝鮮玩具」に関する研究としても重要な位置にあると言えよう。

本稿では、この二つの論考の成果を一步進めて、支配民族による「朝鮮玩

---

又そのためにわれわれの祖先が作り残して去つたところの芸術品なのである。」

<sup>11</sup> 版画家で玩具愛好家としても知られる板祐生は、自ら出していた雑誌を『愛玩人』と命名した。

<sup>12</sup> 鈴木文子「玩具と帝国—趣味家集団の通信ネットワークと植民地」、『文学部論集』（第93号）、2009年3月。

<sup>13</sup> 권희희「입체시각의 ‘조선풍속인형’과 조선인의 시각적 표현」、『민속학연구』（第21号）、2007年12月。

具」をめぐる実践の意義と本質的なねじれについて考えたい。

## 1. 日本の玩具について

ここでは、日本の玩具愛好家たちが「玩具の国」<sup>14</sup>と自負した日本の場合を通して、郷土玩具の全体像を押さえておく。

すでに述べたように、清水晴風は玩具を、①信仰的に造ったもの、②記念的なもの、③子どもに与える物の三種に分けた。この分類法は生産の目的を基準にしたものようで、実際には信仰的に造ったものを子供に与えたり、または記念のものとして飾ったりすることが起こりうるという点で、使用の実態にそぐわない。

『郷土玩具集 春』（郷土の光社、1935年）に収録されたものを例として見てみよう（図1～3）。

（図1）は浅草雷門の前で売られていたもので、文字通り遊び道具、すなわちおもちゃだが、郷土色が鮮明だという意味で郷土玩具として分類されたと思われる一例である。（図2）と（図3）は縁起物で、子供の遊び道具にも



図1 浅草のとんだり  
跳ねたり



図2 一今宮戎の蔵入  
れ

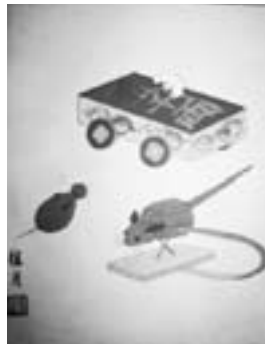


図3 千両鼠

<sup>14</sup> 前掲書、中村美佐雄『郷土玩具の研究』、32頁。前掲書、佐藤潔『玩具と縁起』、2頁。

できる。郷土玩具の中には一般的にこのような二種に加えて、遊び道具にはなり得ない記念品的なもの（郷土色が濃いもの、または縁起物）が混じっている。このように考えると、郷土玩具は使用を基準とした場合、①郷土色の濃いおもちゃや記念品的なもの、②縁起物のおもちゃ、③縁起物の記念品的なもの、の三種を含むものと見ることができるだろう。

郷土玩具の中核をなすのは信仰的に造られたものである。佐藤潔の『玩具と縁起』はこの類いのものを「縁起玩具」と命名して重点的に論じたもので、「縁起玩具」をさらに「縁起的なもの」と「医学に関するもの」とに分け、「用途」別に分類したのが、(表1)である。

(図4)～(図8)は「縁起玩具」の具体例である<sup>15</sup>。「縁起玩具」の中には、(図4)(図5)のように子供に与えることもできるものがあるが、ごく限ら

表1 縁起玩具の分類

縁起的なもの	厄事災難除	雷, 水, 火, 益難除	航海安全
	友引	家庭円満, 夫婦和合	融通
	勝守	迎福, 開運, 出世	護符
	便所神	蚕神	鼠除
	就職		
医学に関するもの	疱瘡	馬鼻風	乳の出る祈願
	病気	虫	婦人の月のもの無き時
	夜泣止	頭痛	咳止
	熱を去らしむ	足をいためぬ	喉につまらぬ
	クサ	麻疹	倒れぬ
	船酔せぬ	禁酒	馬の健康
	下の病	知恵	子育て
	子授け	疫病	無病息災延命長寿
	尿症を治す	涎止	鼻のつまらぬ
出産			

※列記されていたものを、引用の際に表の形で整理しなおした。佐藤潔『玩具と縁起』人文書院、1935年、11-12頁。

<sup>15</sup> 前掲書、佐藤潔『玩具と縁起』、116、162、219、305、331頁。



図4 犬張子(夜泣止,  
鼻つまりの禁厭)



図5 魔除の虎  
(魔除)



図6 オ戎様の鯛(商売繁盛  
の縁起)



図7 高松の嫁入り人形(出世, 魔  
除, 長寿の呪禁)



図8 東福寺の布袋(安産,  
家内和合, 開運福德の守)

れている。

「縁起玩具」はきわめて多種多様で、神社やお寺との関連性が強い。日本が「玩具の国」となったのには、物作りの文化や江戸時代の経済状況などが要因として考えられるが、神社・お寺も重要な要因になっただろう。

## 2. 朝鮮社会の「玩具」の実態

「玩具の国」から朝鮮に渡った日本人の多くが、朝鮮は玩具のない、または少ない社会だと見た。朝鮮人を「悲哀」の民族と評したことで知られる柳宗悦は、元来喪服である「白衣」を着る習慣と玩具の少ないことを、朝鮮人が楽しさを欠く証拠であると述べた。楽しさを欠くから、人は色を離れて永遠に喪に服し、玩具からも離れたというわけである<sup>16</sup>。

<sup>16</sup> 柳宗悦『朝鮮とその芸術』叢文閣、1922年、200頁。



版画家・童話作家で玩具研究にも携わった武井武雄は1930年に出版した著作の中で、「朝鮮は玩具の無い国だ、と殆んど異口同音に」言うのを聞いて朝鮮各地を調査して廻っても、また「南北の朝鮮人自身の口述からも何等得るところが無」いとし、次のように述べている。

それでは果たして本質的に玩具を持ち得ない民族かといふと要するに後天的に環境が廃絶に導いた事実を了解し得るのである。文献に残る処に依ると、京城東大門の前に例年四月八日、玩具市が立つ、とあり、約五百年を遡れば歴然とこの事を見出すのであるが、李朝五百年の儒教に偏凝した施政圧迫は、遂に人形、玩具を夥しく卑下し、むしろ罪惡視したので、その擡頭力を滅殺し、殊に特筆すべきは李朝第十世に暴君燕山君の現はれた一事である。

その状況下で、民心は疲弊し、童心は失われ、家庭における児童の地位が低く、「玩具の育つ雰囲気」ではなかったことは「明白」だ、というのが武井の見解であった<sup>17</sup>。日本の玩具の豊富さに諸要因があったことが考えられるように、朝鮮に玩具が少ないのにも諸要因があっただろうし、武井の言う儒教要因、政治要因がなかったとは言えないだろう。

ただ、武井は知らなかったようだが、この頃にはすでに、朝鮮玩具の実態が精緻に調査・分析されはじめていた。京城帝大の教授であった田中梅吉は、朝鮮総督府の依嘱を受けて朝鮮民俗資料を収集整理した際に集めた玩具とその報告を元に、1926年に「朝鮮玩具目録」<sup>18</sup>という文章を発表している。ここでは「朝鮮玩具目録」を通して、朝鮮玩具の実態についてまず考える。第一、

<sup>17</sup> 武井武雄『日本郷土玩具西の部』地平社書店、1930年、384-385頁。毎年釈迦の誕生日の4月8日(旧暦)の観燈会に玩具を売る習慣があったことについては、武田真一「朝鮮の玩具」(『旅と伝説』編集部編『郷土玩具大全』一誠社、1934年)にも指摘があり、当時もこの日に玩具市が立っていたと言う。(30頁)

<sup>18</sup> 田中梅吉「朝鮮玩具目録」、『民族』(第2巻第1号)、1926年11月。

田中が挙げたもののほとんどが純粋なおもちゃと言っていいものであったことを特記しておく。縁起物の性格を持つ虎の玩具として「紙虎」(張り子の虎)が挙げられているが、これもおもちゃになり得るものである。要するに、田中がまとめたものはおもちゃとしての玩具であって、その他を含む玩具ではなかったと考えることができる。もう一つ考えられるのは、幅広く玩具を収集したかったのに、それが叶わなかった可能性である。例えば、(図9)のような藁人形は正月の民俗信仰にかかわるもので<sup>19</sup>、「縁起玩具」に属する。藁人形には、呪いを掛ける時に使うものと、身を守るために使うものの二種がある。(図9)は後者に該当するもので、これについては釜山郷玩同好会の清永完治の適切な説明がある。

正月十五日に藁人形を造つて御馳走を備へ自分の病気の身代を頼み腹部が悪ければ藁人形の腹に一文銭を入れ、人知れず人通りの多い辻に棄て、災厄から逃れようと云ふのです。女は十一歳男は十歳を厄歳として此の藁人形を厄除けに用ひ瘡瘡の流行した時は患者に此れを抱かせ後に着衣を着せて山に棄てると早く全恢すると云ふ様な迷信が守られて居りますよ<sup>20</sup>。

田中の目録にも「藁人形」という項目は存在するが、紹介されているのは全くの別物で、純然たるおもちゃである。後の玩具愛好家たちが発見できた朝鮮の「縁起玩具」は、これの他に、(図10)のボソン<sup>21</sup>、(図11)の腰吊り<sup>22</sup>、

---

<sup>19</sup> (表紙)『愛玩人』第11号、1937年。

<sup>20</sup> 清永完治「鮮玩閑話」(一回)、『土偶』(第2期第1号)、1936年3月、4頁。

<sup>21</sup> (図10)のボソンは小児用で、小児が満一歳の誕生日を迎えた時にこれを履かせ、その子の「将来の健康と幸福を祈る」。尾崎清次『玩具図譜』(第四卷)、村田書店、1983年(初出は、『朝鮮玩具図譜』、笠原小児保健研究所、1934年)、104頁。

<sup>22</sup> 「鉛で作り紙を内側に張り上部を開き袋の如くにし内に香料を充たしてゐる一種の匂い袋で、模様は巴及び縁喜的な文字があつて朝鮮らしい特色がある。」と説明されている。同上、94頁。



図 9 薰人形



図 10 ボソン



図 11 腰吊り（正式な名称は不明）



図 12 紙燈

(図 12)の紙燈<sup>23</sup>があるにすぎない。日本の郷土玩具のかかなりの割合を占める「縁起玩具」が朝鮮にはあまりなかったからだろう。朝鮮には民俗信仰またはいわゆる「迷信」は数多く存在したが、それが別の形で現れ<sup>24</sup>、日本のように

<sup>23</sup>「日本の切籠に似た形で、其の各の隅には五色の紙を付け各面には福寿子孫康盛等の文字を色紙を切り抜いて張り（略）其の下には五色の紙を垂れてある。四月八日を仏誕日又は浴仏日と云ひ士女は衣裳を着更へて遊び、或は附近の寺院に詣で、（略）この紙燈を掲げ福寿多男子を祈る。（略）子供のある家では、其の子の数だけ上から順次下に燈を点じ上を長子とし下を末子とする、燈火の最も明瞭なものに当たつた者は吉運であるとし、燈火の暗いものは凶として、其の燈に酒餅を供へ運直しをする。」との説明が付されている。前掲書、尾崎清次『玩具図譜』（第四巻）、96頁。

<sup>24</sup>例えば、お寺から購入したお札に頼り、吉祥文様を多用する。または風水思想に依拠し、文字や虎の絵などを用いて招福や厄払いをすることは近代においても一般的なこと

「縁起玩具」に結びつくことが稀だったのである。このことは、後述するように、朝鮮玩具のある重要な問題にかかわってくる。

第二、田中の文章は、朝鮮のおもちゃのほとんどが手製で、市販のものはわずかしかなかったことを伝えている。彼によれば、朝鮮にはおもちゃ「専業の商人」がなく、おもちゃが常時店頭に置かれているわけでもなかった。実際、田中の目録の1～14までの囲碁、将棋、双六などは市販のもので、その他のすべてが手製であった。おもちゃは本来手製から出発したのだから、近代化以前の農業社会である朝鮮のおもちゃのほとんどが手製だということも不思議ではない。田中は玩具収集の難しい理由について、目録に挙げたおもちゃの「大多数」が「手作りでしかも概ね一時的な当座の遊戯のために作られたもので、形を壊さずにそのままに家庭に保存される場合が極めて少ない」と説いたが、このことは後の玩具愛好家たちが共通して認めるところで、彼らは朝鮮の子供に作らせて収集することもあった<sup>25</sup>。

「一時的な当座の遊戯のために」作られた典型的なものが、(図13)のコヌ<sup>26</sup>と(図14)<sup>27</sup>、(図15)<sup>28</sup>の閩氏(カクシ)である。田中の説明を見ると、コヌは「木製の細工品」も稀にあったが、「地上に線を引いて盤の代用」とし、「駒にはあたりにある小石瓦片藁屑などを任意に利用するのが普通」とある。1960年代、70年代の現代韓国でも木陰で、小石や木の葉などを使ってコヌ遊びをする光景はよく見られたものである。これを通して、第三に、自然・素朴を朝鮮のおもちゃの特徴として指摘できるのではないかと思われる。以下、この点について、他の文献に拠りながら補足しておきたい。

先に紹介した閩氏には様々な種類のものがあり、最も一般的なのが草作り

---

あった。おそらく、ここに挙げたお札、文様、文字、虎の絵などは一枚の紙や布の表面に表現されるだけであったために「縁起玩具」として採用されなかったのだろう。

<sup>25</sup> 前掲、清永完治『鮮玩閑話』(一回)、5頁。阿部衛江『朝鮮の玩具』、『緑旗』第四卷第八号、1939年8月、45頁。前掲書、尾崎清次『玩具図譜』(第四卷)、84-87頁。

<sup>26</sup> 『한국민족문화대백과사전』 한국성신문화연구원, 1991年。

<sup>27</sup> 前掲、阿部衛江『朝鮮の玩具』、45頁。

<sup>28</sup> 前掲書、武井武雄『日本郷土玩具西の部』、384頁。

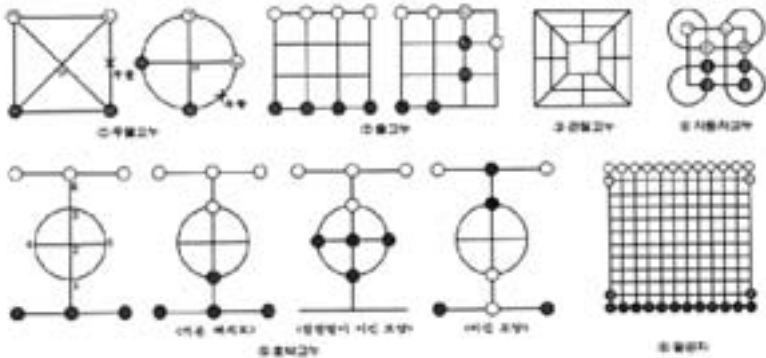


图 13 코누



图 14 關氏



图 15 關氏

の關氏（「プルガクシ」）であった。尾崎清次の『玩具図譜』（第四卷）には次のような説明がある。「寒い冬が過ぎて春になり若草が萌え出すと、朝鮮の女の子はその柔かい青草を採つて髪を作り、赤や其他の色の布で衣裳を着せて遊ぶ」。例えば、頭には「草の球根を用ひ、髪は青草で、簪にはマッチを使つてある、そのマッチの頭の部が巧に簪の頭として利用してある」<sup>29</sup>。（図 14）の關氏は、「京城の貞陵の近くの川べりで女の子達が作つてゐたもの」で、「パイプを頭にしてそれに草で髪をあんて釘でとめてあり」、「リボンは赤い布、草はひひなぐさ」である<sup>30</sup>。（図 15）については説明が付されていないが、

<sup>29</sup> 前掲書，尾崎清次『玩具図譜』（第四卷），16頁。

<sup>30</sup> 前掲，阿部衛江「朝鮮の玩具」，45頁。

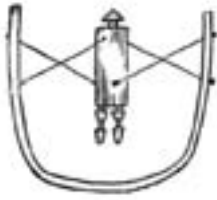


図 16 木人（正式名称は不明）



図 17 船

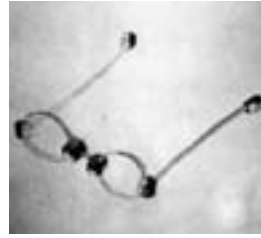


図 18 眼鏡

黍の茎を入れて体の中心部と頭部になっているものと思われる。尾崎が、このようなものが子供に「喜ばれ作られつつある」ことは「経済的事情」や「環境」要因にもよるだろうが、「其の素朴な表現のうち小児の心を牽くものがあることは争はれぬ事実」と評したように、自然・素朴は重要な文化的な特徴であって、単なる文化的な欠如ではない。

コヌについても同じ事が言える。モノとして持たずとも、というより、持たないからこそ、どこでも遊べ、いくらでも描いて遊んで消すことを繰り返すことができる。(図 16~18)<sup>31</sup> からも分かるように、自然・素朴は閻氏やコヌに限らず、朝鮮のおもちゃ文化に幅広く見られる特徴であった。手製という朝鮮のおもちゃ文化の特徴の中には、さらに自然・素朴という特徴が内包されていたと言えよう。

以上は、日本人の研究を通して知りうる朝鮮玩具の実態である。

### 3. 朝鮮趣味と「朝鮮玩具」の混乱

権ヒョッキが指摘したように、土産品としての「朝鮮人形」は植民地期か

<sup>31</sup> (図 16) は、前掲、田中梅吉「朝鮮玩具目録」、106 頁、(図 17-18) は、前掲書、尾崎清次『玩具図譜』（第四巻）、84-87 頁。(図 17) については、「松の皮の厚いものを剥ぎ取って、内部を抉り外面を舟状に削つたもの」で「慶州の少年が自ら作ったもの」、(図 18) については、「高粱、玉蜀黍等の茎の皮を細く割き、之を以て眼鏡の縁と脚とを作り、茎の芯を細く切つて其の繋ぎに用ひたもの」との説明が付いている。

ら「日本の伝統玩具の影響の下で」生産され、また消費された<sup>32</sup>。内地からの日本人観光客の希望に添う形で、朝鮮の様々なモノが「風景」として切り取られ、絵はがきまたは「玩具」（記念品）として消費されたのである。「人」も例外ではない。朝鮮人は虎やジャンスン<sup>33</sup>と同じく、様々な一とりわけ、古風な一姿の「風景」として土産品店やデパートに陳列された（図 19）。それを支えたのが「朝鮮趣味」である。日本人商業者は「朝鮮趣味」に沿って土産品を生産したが、玩具愛好家たちもその中から「尤玩」（優れた玩具）を選別しつつ、「創生玩具」（「創玩」）によってそれに一枚噛むことになる。

前述したように、玩具愛好家（または玩具研究者）が探し求めたのは、単なるおもちゃではなく郷土的な小物としての朝鮮玩具だったが、朝鮮には日本に豊富に存在した、純粋なおもちゃ以外の郷土的な小物がきわめて少なかった。そして、このギャップが不思議な現象を生むことになる。ここでは、日本人の玩具愛好家たちの活動を中心に、その不思議な現象について考えてみたい。

朝鮮玩具関連の文献全体を通して鮮明に浮かび上がってくるのは、玩具愛



図 19 植民地期の土産品（釜山近代歴史館『근대, 관광을 시작하다』2007年, 175-180頁）

<sup>32</sup> 前掲, 권혁희 「일제시기『조선풍속인형』과 조선인의 시각적 표현」, 7頁。

<sup>33</sup> ジャンスンは村の入り口のところに立てられていたもので、里程標の役割をすると同時に、村の守護神としての意味合いもあった。（図 19）の左側の写真の背の高いのが、土産品として小型に作られたジャンスンである。一般的に、胴体には天下大將軍・地下女將軍と書かれている。

好家にとって、朝鮮社会に元々あった「古玩」と、韓国併合以降、日本人によって土産品として作られたもの（「新玩」<sup>34</sup>または「創玩」）との区別が重要な課題であると同時に、一種の難問でもあったという点である。

田中梅吉は「朝鮮玩具目録」作成の方針として、「日韓併合の年」以降の「新しい玩具」はすべて省いたとし、その省かれた玩具のほとんどは「内地からの近年來の輸入品」だと述べている。次の引用文を見ると、武井武雄の場合もきわめて厳格に分けて考えていたことが分かる。

一般に朝鮮の玩具と思惟されてゐるものゝ多くは皆明治末期の併合の後に、彼の地に移住した内地人の手に依つて新作されたもので、例へば天下大將軍、地下女將軍の類の如き、厖大なる野外の実物を縮小模索してお土産玩具たらしめたのは即ち併合後の事で、決して玩具として朝鮮にあつたものではない。しかも男は女將軍を、女は大將軍を持てば守りになる、などと勝手な御利益まで案出して売出し、二た股の枝を利用して一本に両体を彫りつけたものとか、いろ／＼ある(略)。その外福神といふのも同様、木履を寸余に模索した玩具とか又砧、農民美術風の木彫で朝鮮の風俗を現はした数々等皆この中にはいるものである。更に材料を土とするものも、風俗人形、鬼の首、その他全部が新作であり、張子は尚更その口で、虎、鳩笛、蛙その他の起上り、仮面など(略)、嚴密な意味でそれ等総ての新作品は郷土的なものと言ひ得ない<sup>35</sup>。(下線—引用者、以下同じ)

ところが、田中と武井が「新玩」と見なしたもののいくつかは、尾崎の『玩具図譜』（第四卷）では、朝鮮玩具として名を連ねている。以下は、その事例である。

① 洗濯棒（図 20）：「砧棒」となっているが、正しくは「洗濯棒」である。

<sup>34</sup> 前掲書、武井武雄『日本郷土玩具西の部』、385 頁。

<sup>35</sup> 同上、386 頁。



日本人の間では、朝鮮の婦人の洗濯する姿が朝鮮名物の一つになっていた。『玩具図譜』（第四巻）には次のような説明がある。「京城その他で美しく彩つた一尺許りの之と同形の砧棒を売つてゐる、之は日鮮併合後日本人によつて作り出された土産品であるが、本図のものはその紋様は全く朝鮮的であり之を求めたのは朝鮮人の小さい荒物屋であるから、これは元来朝鮮固有のものであらうと信ずる。<sup>36</sup>」流布していた洗濯棒には、花模様のもの他に虎が描かれたものがあった（図 21）。

- ② 木履（または、木靴）（図 22）：『玩具図譜』（第四巻）の説明は次の通りである。京城などの土産品店にはこのような「小形の木履の玩具」が必ずあるが、この図のものは「小児満二歳の誕生」の時に履かせて「将来の健康幸福を祈る。」「模様には朝鮮らしい特色を持つてゐて、同じく京城府内の或る朝鮮人の小さい店で求めたもので、この習俗も其の店の老人から聞いたのである、従つて此の木履が前述の土産品の原型をなしたものであらうと思ふ。<sup>37</sup>」

「信ずる」とか「と思ふ」といった言い回しに表れているような、判断の際



図 20 洗濯棒①<sup>38</sup>



図 21 洗濯棒②<sup>39</sup>

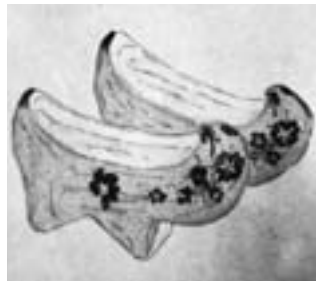


図 22 木靴<sup>40</sup>

<sup>36</sup> 前掲書，尾崎清次『玩具図譜』（第四巻），100 頁。

<sup>37</sup> 同上，102 頁。

<sup>38</sup> 同上，尾崎清次『玩具図譜』（第四巻），101 頁。

<sup>39</sup> (表紙)『愛玩人』第 3 号，1937 年。

<sup>40</sup> 前掲書，尾崎清次『玩具図譜』（第四巻），103 頁。

の尾崎の曖昧さはさておき、ここでは、尾崎の判断基準が田中・武井と決定的に違うところがあったことを確認しておく。前述したように、田中・武井は日本との関わり以前に、すでに朝鮮に存在した「古玩」と後から（日本人によって）作られた「新玩」とを区別しているわけだが、尾崎は「原型」となるものが以前からあり、後からそれを模して小さく作ったものまでを本来の「朝鮮玩具」というカテゴリーに含めてしまっている。しかしそれは、朝鮮の様々な「風景」を切り取って、言い換えれば、模して小さく作られた種々の朝鮮土産品（後述するジャンスン、人、虎など）と、性格として同じと言うべきだろう。ここに朝鮮の郷土的な小物としての「朝鮮玩具」と「新玩」の「朝鮮土産品」との区別の混乱が見て取れる。朝鮮人が木靴や洗濯棒を生活文化として持っているということと<sup>41</sup>、それを（子ども用の三分の二のサイズに）小さくした玩具を持っているということは、明らかに違う。前者は朝鮮の文化だが、後者は日本人が作り出した偽の朝鮮文化なのである。言い換えれば、後者は「朝鮮文化」に似せた「朝鮮土産品」ということになるだろう。生活の中にある一般的な木靴や洗濯棒は、彼には味気なく、だからといって、存在の有無さえ定かではない子ども用の彩られたものが容易く手に入るわけでもない。そこでつい、生活の中にあるものではない「新玩」を「朝鮮玩具」のカテゴリーの中に含めてしまったと考えられる。

尾崎が、朝鮮の文化としての「朝鮮玩具」にこだわりながらも、「新玩」を「朝鮮玩具」の中に含めてしまったのは、重要な特徴であり、問題点でもある。この後、玩具愛好家たちの間でそれがもっと鮮明になる。釜山郷玩同好会の中心メンバーだった清永完治を代表例として取り上げる。彼は木靴について、子供用を「模して」作られた「土産品」であるとはっきりと認め、「合併後の創玩であるけれど可成の愛着を感じ」と述べている。洗濯棒については子供用の洗濯棒が存在したとはせず、一般的なものを「模した玩具」ととし、「中々民俗色がよく出て居り愛しい」と述べている<sup>42</sup>。重要なのは、清永

<sup>41</sup> 子ども用の洗濯棒が児童文化として存在したことを示す文献は、他にはない。

<sup>42</sup> 清永完治「鮮玩閑話」（二回）、『土偶』（第2期第2号）、1936年11月、7頁。板祐生も

がこれらの「新玩」の由来を明確に認識しながらも、「鮮玩」のカテゴリの中で扱っているということである。このことは、釜山郷玩同好会全体、そしてこの同好会とも深い関係にあった板祐生にも顕著に見られる傾向であった。郷土玩具の一つとしての「朝鮮玩具」の不足分は、いつのまにか日本人の朝鮮趣味に合う「新玩」の土産品を含めてしまうことで補われたのである。

次は、写実的な人形についてである。田中の「朝鮮玩具目録」には閻氏と不倒翁が挙げられている。閻氏については「粘土で着物をつけた人形の姿を作りその上に胡粉を塗り彩色を施す」という記述が見られることから、はっきりと目鼻を描いた写実的な閻氏存在を認めていたように思われる。一方、武井は不倒翁はすべて「新玩」と見ており、閻氏としては目鼻のない草づくりのもの（プルガクシ）しか挙げていない。目鼻のある閻氏、すなわち写実的な人形が朝鮮文化として存在していたのかという問題は、「朝鮮玩具」を考える上で大変重要である。また、閻氏だけでなく、人間を模して作った不倒翁も目鼻がはっきりと描かれていて、同様の問題を含んでいる。

この点で田中と武井は見方が分かれたわけだが、尾崎の場合はどうだったかを見てみよう。尾崎の『玩具図譜』（第四巻）には目鼻のある閻氏が四つ紹介されている。（図 23）はその一例である。尾崎は「閻氏に目鼻を附けると妖怪（トツカビ）となるといふ伝説がある」<sup>43</sup>と書いている。この俗信は玩具愛好家の間でよく知られており、また「閻氏は作つたものをそのままに家におくと凶事があるとか、恐しい夢に出てくるとかいふ言伝へがあつて、老人のゐる家などでは、夕方は捨てさせる」との記述も見られる<sup>44</sup>。要するに、人形は不吉なものとしてされており、とりわけ、目鼻のある写実的な人形（武井の表現を借りるならば、「巧妙な人形や面」<sup>45</sup>）を家に置くことを嫌っていたのであ

---

自分の朝鮮趣味に合うものとしてこの二種を好んだ。「朝鮮の玩具」、『愛玩人』（第4号）、1937年。

<sup>43</sup> 前掲書、尾崎清次『玩具図譜』（第四巻）、12頁。

<sup>44</sup> 前掲、阿部衛江「朝鮮の玩具」、45頁。

<sup>45</sup> 前掲書、武井武雄『日本郷土玩具西の部』、390-391頁。武井は次のように述べている。



図 23 閻氏



図 24 不倒翁①



図 25 不倒翁②



図 26 不倒翁③

※ (図 23) ~ (図 26) は前掲書, 尾崎清次『玩具図譜』(第四巻)。

る。

ところが、いつからかこの俗信にもちょっとした抜け道ができた節がある。尾崎は先に引用した閻氏に目鼻をつけると云々の説明に続いて、「しかし一夜便所内にて閻氏を置き後ち取り出して顔を描けば何事もないといふ」と付け加えている。おそらく、社会の変化に伴って 1920, 30 年代にはこのような理屈で抜け道を作り、目鼻をつける傾向が少しずつ現れたのではないかと推測されるが、確かなことは不明である。

では、(図 24~26)に見られるような写実的な(精巧な)人形(不倒翁)についてはどうだろうか。尾崎は「張子」はすべて新作だとした武井の見解を退け、「決して新らしいものではな」と主張した<sup>46</sup>。しかし、まず問わなければならないのは、「張子」がどうかではなく、写実的な人形を嫌い、特に粗造りの閻氏さえ家の中に持ち込むことを嫌った朝鮮社会で、わざわざこのような精巧な作りのものをはたして生産したのだろうか、ということだろう。この他に僧侶、猿、馬、虎、ジャンソンの不倒翁もあったが、この類いの不倒翁が古くからあったという説に対しては疑念が持たれていたようだ。釜山郷玩同好会の清永完治は次のように述べている。

---

「朝鮮、特に女子供は巧妙な人形や面には妖神がそれに乗移るとか、前からそれ等に乘移つてゐた妖神が夜中に這ひ出していやな事をするとかいふ迷信を深く信じ込んでゐるので、人形や面を兎角嫌がる」。

<sup>46</sup> 前掲書, 尾崎清次『玩具図譜』(第四巻), 26 頁。

どちらかと云へば余りに写実的なところがある様です。(略)

色々な説がありますがどうも日韓合併後の所作ではないかと思はれてならないのですよ。張抜の仮面など相当に古いものがある事を考へますとそれ以前からあつた様にも思へますけれど成果に余り近代味がありますので、合併後に出来たものと信じたい気がします<sup>47</sup>。

断定は難しいが、以上のことから、写実的な人形（不倒翁）は「新玩」と見なすのが妥当ではないかと思われる。そうだとすれば、ここに二つの問題点が浮かび上がってくる。第一、写実的な人形が朝鮮社会にもともとあったものではなく、日本人の手になるものだとすれば、先に挙げた（図 19）や不倒翁など、朝鮮土産品として出回ったすべての人形の存在が「朝鮮文化」に由来するのではなく、日本人の朝鮮趣味から「風景」として切り取られ、消費されたものだったと見なければならぬ。第二、にもかかわらず、朝鮮由来とは言えないものが朝鮮の郷土的なもの、すなわち「朝鮮玩具」として分類されていた。すでに述べたように、釜山郷玩同好会は木靴や洗濯棒が「新玩」だという見方をしながらも、郷土玩具の一つとしての「朝鮮玩具」のカテゴリーに入れていたわけだが、不倒翁についても同じことが言える<sup>48</sup>。

ここでも、郷土玩具としての「朝鮮玩具」の不足分が、「新玩」をもって補われたことを確認することができる。そうやって創られた「朝鮮玩具」は海を渡り、今でも「朝鮮玩具」として分類され、しばしば人の目に触れるところに展示されている。（図 27）は東洋民族博物館に展示されているものである。ジャンソンは日本で販売されたものが北海道の八雲町の郷土資料館のようなところに展示されていることもある。風俗人形は独立後の韓国でも作られるようになり、植民地期のものときほど変わらないものが、つい最近（2009年）までソウルの民俗博物館のショップにも並べられていた。歪な「朝鮮玩具」の歴史はまったく自覚されることなく現在に至っているのである。

---

<sup>47</sup> 前掲、清永完治「鮮玩閑話」（一回）、4頁。

<sup>48</sup> 同上、4頁。

植民地期の「朝鮮玩具」



図 27 東洋民族博物館の展示物



図 28 ソウルの国立民俗博物館の  
ショップに陳列された土産品  
(家族人形)

## 結び

「朝鮮玩具」というカテゴリーの最大の特徴は、その正体の不明瞭さにあった。「朝鮮玩具」をめぐる展開は、この特徴によって決定づけられた側面が大

きい。

まず、田中梅吉の「朝鮮玩具目録」は、おもちゃを中心とするものだが、最初の「朝鮮玩具」に関する仕事として位置づけることができる。不明な部分が残るとはいえ、日本との関係が始まる前の朝鮮のおもちゃの目録が作成されたことの意義は小さくない。また、田中梅吉の仕事に加えて、尾崎清次の仕事などを通して、朝鮮のおもちゃの性格(手製のものがほとんどであり、自然・素朴を特徴とすること)や、おもちゃを除けば「郷土玩具」と言えるものが極めて少なかったことなどが浮き彫りにできるという意味でも、それらの仕事の意義はあったと言えよう。

しかしその一方で、郷土玩具の一つとしての「朝鮮玩具」は数が少なく、その不足分が日本人の朝鮮趣味に合う「新玩」の土産品で埋め尽くされたというのは、重大な問題点として指摘しておかなければならない。郷土玩具は本来変わりゆくものであり、産業との結びつきから見ても「新玩」は当然許容されるものである。ところが、植民地においては、それが急激に、支配民族によって、しかも彼らによって持ち込まれた枠組みと、朝鮮趣味という特別な視点から形作られる。それによって「朝鮮文化」なるものが歪曲され、朝鮮人は数多ある「風景」の一つとして切り取られて展示される。そして、長い年月が流れても、「朝鮮玩具」の名の下に、あたかもそれが朝鮮の文化であるかのように、延々と展示され続ける。ここに「朝鮮玩具」というカテゴリーの植民地性がある。

朝鮮の玩具を収集し研究したのは日本人だけではない。東アジアを何度も調査して廻ったアメリカの人類学者のフレドリック・スターは、玩具収集にも熱心で、彼の日本玩具についての考えが通訳を通してラジオで放送されたこともある<sup>49</sup>。1921年の訪問の時の新聞には、スターの玩具収集に関する記事が見られる<sup>50</sup>。その記事によれば、彼は日本や朝鮮に滞在している間に各方面

<sup>49</sup> フレドリック・スター「日本土俗玩具」, 前掲書, 「旅と伝説」編集部編『郷土玩具大全』, 44-47頁。

<sup>50</sup> 「お札博士がシカゴで日本玩具を展覧」, 『読売新聞』1921年5月10日。

### 植民地期の「朝鮮玩具」

から玩具の寄付を受けて、「東洋の玩具」を全部で750種、2千個ほど集めており、シカゴへ帰ると展覧会を開く予定と語っている。「朝鮮にも随分面白いものがある」と言う。玩具に関する自分の趣味について、「色んな伝説や口碑が背景となつてゐる、つまり地方色の強いもの」を好むと言っていることから、朝鮮の「面白い」玩具というのも、そういったスター自身の趣味に合うものを指していたと考えられよう。だが今のところ、スターが収集したとされる「東洋の玩具」の行方は分かっていない。「朝鮮玩具」の実態をより正確に把握し、日本の玩具愛好家たちの仕事を評価する上で、今後、スターが語った朝鮮の地方色の強い玩具とはどのようなものだったのかを確認することは重要である。当地の人々から寄付を受けたということからして、それらはいわゆる「古玩」であった可能性が高いと考えられるからである。

※この研究は科学研究費補助金（基盤研究(B)）の助成を受けて行われたものである。